柴田君の『日本語のアクセント体系』を読んで

金田一春彦

〔要旨〕 ワカメの味噌汁は、ナイフとフォークを使うよりも箸を使った方が食べよい。日本語のアクセント体系の解釈には〈のぼり核〉〈くだり核〉よりも、〈タキ〉一元の方がうってつけである。

一

柴田武君が本誌二十一号に発表された『日本語のアクセント体系』は、目の覚めるような論文だった。従来の〈くだりアクセント核〉という概念のほかに、〈のぼりアクセント核〉という新概念を設定し、日本全国の代表的なアクセント体系に新解釈を加えていかれる手並はなか〳〵鮮やかである。至る所で持説を批判された私などは、ことに大きな刺激を受けた。思うに、私など術語の使い方に関して、少しノンキすぎ、独善的すぎた。私も、これを機会に、海外の進んだ学説をも読み、考えの及ばなかったところを補正しようと思う。

私は、こんなわけで、柴田君の学界への貢献に対しては、衷心から敬意を表する。が、それでは同君の新見をそのまま受け入れるかというと、どうも躊躇を感じる。また、柴田君の文章を読むと、私の真意を汲み取っていただけなかったところも、まま見受けられる。そこで、もう一度、同君に、この問題について考えていただきたいと思い、私の読後感をつづることにした。読みそこないがあるかもしれない。その時は、改めてお教え願いたい。

二

柴田君のアクセント観には、幾つかの注目すべき特色があるが根本的には次の二つの方針の上に立っていると思う。

その一つは、同君が第二章第一節の最初に言っておられるが、《単にどこが高いとか低いとかいうのは音声学的な見方であってアクセント核があるとか、ないとか、どこにあるとか、いうのが、音韻論的な見方だ》と考えることである。この考えは、早く宮田幸一氏に芽生えがあり、和田実君に受けつがれ、服部四郎博士が、『音韻論から見た国語のアクセント』（『国語研究所叢』第二輯）で称揚されてから、にわかに重きを加えつつある考え方と同じ系列のものである。

柴田君のアクセント観のもう一つの特色は、ページ五五の上段などでうかがわれるが、アクセントの機能の中で、音節群を一つにまとめる〈統合機能〉を、大きく取上げることである。これは有坂秀世博士の〈統成的機能〉に相当するものであるが、〈一つのアクセント単位中に一つずつのアクセント核〉という主義で極力押していこうとするところに柴田説の特色が認められる。

私の知っているところでは、柴田君がこのようなアクセント観を懐くに至ったのは、すでに昭和十七・八年ごろのことであり、私は当時、同君から、宮田説の優秀性をしきりに説かれたものだった。今、改めて活字になった同君の論文を読むと、当時の同君の姿がなつかしく思い起される。

（註）柴田君のアクセント観の特色は、もちろん上にあげた二つだけではない。それは第二章第二節に、自身のアクセント論の進め方の方針を明記しておられるところからも知られるが、例えば次のような点を数えることができる。

(1) アクセントの型を認める単位として、いわゆる〈語〉をとらずに〈アクセント論的単位〉――大体従来の〈文節〉にあたる。以下「文節」と呼ぶ――をとること（ページ四八の上段）。

(2) 文節のアクセントの区別的特徴を見つけるためには、また同じモーラ数の文節どうしを比較する方法をとり、文節が連続した場合における現象はとりあげないこと。

右のうち、(2)の考えは、服部四郎博士が、一時とっておられた行き方で、おもしろい一つの行き方であるが、言語学会例会で、柴田君がこの研究を口頭で発表された時に、すでに服部博士から批評が出、恐らく柴田君自身も考慮中であろうと思うので、今は取り上げないことにする。また、たとい、この点に関する同君の意見が変化しても、同君の、のぼり核・くだり核という考えには変更がないにちがいない。

次に、アクセントがきまっている単位として、語をとらず、文節をとることは、神保格教授・宮田幸一氏以来、多くの学者によって言われて来たことで、珍しいことではない。あるいはたいていの学者はむしろこの考えであって、私のように〈アクセントは多く語について定まっている〉と考える方が異端者かもしれないので、この際は、私の方で柴田君と同じ意見になって問題を考えていくことにする。

三

柴田君のこの論文は、以上二つの観方を根本方針として、独自なアクセント観を組み立て、諸方言のアクセント体系を、〈のぼりアクセント核〉〈くだりアクセント核〉という二つの概念で、解釈して行くものである。第三章の本論がその実演であるが、それをあげつらうに先立ち、同君の根本方針についての私見を申し述べておきたい。

柴田君の根本方針のうち、第一の立場、〈どこが高だとか低だとかいうのは音韻論的ではない〉という行き方、これに、まず、私は全面的には賛成しない。私は、まだ、有坂秀世博士が、『アクセントの型の本質について』の中で、《音韻論的な「型」の見地に立つ時はハシ（端）ハシ（橋）の如き文節は当然下上型と見なされるべく、ハシガ（端が）は下上型、ハシガ（橋が）は下

上下型と見なされるべきものである》と言われた考えに強い愛着を感じる。平山輝男氏は、『言語島の音調体系成立とその解釈』(『国語と国文学』三二ノ一二所載)において、ていねいに発音した場合の高低の姿を新たに〈反省的型〉と呼び、服部博士の〈音韻論的解釈〉と並べて、(　)のかっこの中に入れて示しておられる。これは、やはり有坂式のアクセント観を捨てきれないためと察せられ、共感を禁じ得ない。——が、それはそれとして、アクセント核の有無と位置だけを問題にする柴田君のようなアクセント観も、私は一つの行き方として尊重する。で、この原稿の中では、私も一往そのような考えに立ち、論を進めて行こうと思う。

ところで、柴田君のこの論述の中には、ちょいちょいその考えで一貫していないところがまじるように思う。そして、それは、同君の第二の根本方針《アクセントの機能として統合機能を重んじること》との衝突から来ていると思う。

例えば、ページ六〇の都城方言では、すべての二モーラの文節は○●型であり、すべての三モーラの文節は○○●型である(以下、白黒のマルで表わすのは、平山氏の反省的型)。もし、音韻的対立という点から見ると、この方言には、音の高低に関する対立はなく、したがってこの最後の**高**は音韻論的に無意味である。しかも、柴田君は、○●型・○○●型というアクセントを、それぞれ、○「○型(「はのぼりアクセント核のしるし。斜線で囲むことは略する。印刷の都合である。以下同じ)・○○「○型と想定している。これは、最後のモーラの**高**に、音節を統合して一つの文節にまとめるはたらきを認めたのによるにちがいない。

ところが、そう考えるならば、この都城の各文節の最後の**高**は、東京方言の**タケ・タケガ**……の類における、最初のモーラの低と同じものではないか。東京で「この竹が枯れた」を**コノタケガカレタ**という。この場合に、コ・タ・カの低が、それぞれ文節のはじまりを示しているのは、都城で**コノタケガカレタ**という場合の**ノ・ガ・タ**が文節の終を示しているのと同じ役割をつとめている。すなわち、アクセントの統合機能を重要視する時は、東京方言の**カゼ・カゼガ**のカの低を無意味だと言えなくなってくる。そうすると、東京方言にも上りア核を認めることになってくるのではなかろうか。

ページ五八のエイ町方言でも、平山氏のA型にくだりア核を認めるなら、B型の方は核なしと見た方が、東京アなどと釣合いがとれると思う。

ここで問題なのは、アクセントの統合機能なるものである。これは、日本語のアクセントにおいては、あまり買い被ってはいけないと思う。その証拠には、京都方言の「竹」とか「竹が」とかいう類の文節のアクセントは、**タケ・タケガ**のように全平型である。しかもそのあとに私のいうタキもない。この類の文節は各地の方言にたくさん見られるが、これは統合機能ゼロの例ではないか。日本語にこういうアクセントをもつ文節がたくさんある以上は、アクセントの統合機能はあまり高くは買えないと思う。

柴田君は、また諸方言のアクセント体系を解釈するにあたり、統合機能を重んじる結果、一つの文節には、私の言うアクセントのタキを一つ以上考えることを拒んでおられる。これについての私見は後述する。

四

さて、柴田君は、この論文で、ア核の有無・種類・位置による日本語諸方言のアクセント体系の分類を示すに先立ち、第二章第一節で、もう一つのアクセント体系の分類を提示しておられる。それは一つ〳〵の語類について、その具体的な高低の姿は一往考慮の外におき、もっぱら、どの語類とどの語類とのアクセントが合流しており、どの語類とどの語類とが別の型に成っているかを規準とした分類である。その結果は、ページ四六に表示されているが、この試みには敬服した。これで見ると、二音節名詞のうちの私のいわゆる第一類の語彙などは、その特殊性がよくわかってたいへんおもしろい。もっとも慾を言えば、全体をⅣ—Ⅴの方言と、Ⅳ・Ⅴの方言とに分けたら、その中も、さらに語類の区別のし方で区分した方がよかったと思う。例えば、Ⅳ—Ⅴの方言はⅠ—Ⅲの方言と、Ⅰ・Ⅲの方言に分け、Ⅳ・Ⅴの方言はⅠ—Ⅱの方言とⅠ・Ⅱの方言に分けるというような試みがほしかった。

そうして、私はこの分類に、価値を認めるだけに、ページ四七で次のように言っているのは、もったいないと思う。

> 九州西南部の諸方言はⅣとⅤとが一つになっている点では、京阪アクセントの諸方言よりもむしろ東京方言と同じグループに属するということになる。これは正しいであろうか。

あとの方の同君の記述を読むと、同君は、諸方言の系統を論じる場合、この節で認められた類似関係よりも、同君が第三章で判定した類似関係の方を、重要視しているように見える。が、私は同君がこの節で認めた類似関係の方がはるかに重要だと思う。それは、この節で認められる類似関係は、同君以外の人がとやかく言っても変更できない厳然たる事実であるが、一方同君が第三章で想定したア体系による分類は、ちがったアクセント観に立てば簡単に所属がちがってくる分類だからである。私は九州西南部の方言は東京方言と同じ系統であることを実際に証明できると考えるが、これについては他の場所ですでに述べたので、ここでは省筆する〔註〕。

〔註〕簡単には、『東洋語研究』Ⅲの『語調変化の法則の探求』に発表した。その後論文集『対馬の自然と文化』に載せた『対馬・壱岐のアクセントの地位』の中で、やゝ詳しく論述した。

五

上にも述べたように、柴田君は第三章において、全国の方言の中から代表的なものをえらび、それを氏の、のぼりアクセント核・くだりアクセント核という二つの概念で、解釈して行かれる。

元来、くだりア核という考えは、宮田幸一氏にはじまるものであること、柴田君も言及しておられるとおりであるが、のぼりア核の方も、先例がないわけではない。例えば、金田一京助博士が『私自身の方言を顧みて』〔『方言研究』第三輯所載〕のページ二六に、東京・京都・盛岡方言のア体系を比較してこう述べているのは、柴田君の新説とちょっと似ていると思う。

> からして出来上った型について、その特徴を云ったら、近畿アクセントでは上る所と下る所とがきまってゐて、そこがやかましいのに、東京アクセントは、上る所は、左程やかま

しくはなく、此処から下るといふ所がやかましい。そこがアクセントの頂点をなす。盛岡のは、ここから上る、といふ所がアクセントの頂点を成す。さういふ特徴も確かに一つの特徴で、東京アクセントと異るといへば、異る点である。

ただし、これは、柴田君が考えたような、この行き方で全国のア体系を解釈しようという大がかりのものではなかった。また、その内容も、例えば、京都方言の「野原」という語は、ノからハへののぼりと、ハからラへのくだりと両方が大切だと考える点などで、柴田君の考えとは、かなり異質のものだった。

さて、柴田ののぼりア核・くだりア核であるが、私の結論を先に言うと、この二つの術語を使い分けることは一種のゼイタクだと思う。私は、ア核という考えで、日本語のアクセント体系を解釈しようとするならば、同君のくだりア核にほぼ等しい〈アクセントのタキ〉という術語一本で、現在の諸方言はたいてい解釈でき、その解釈の方がのぼり・くだりの両核による解釈よりもすぐれているように思う。私がこの稿で述べたいと思うのは、タキ一元によるアクセント体系の解釈である。

私の、アクセントのタキという術語は、宮田幸一氏の『日本語のアクセントに関する私の見解』(「音声の研究」II)から採ったもので、

《そのアクセント単位の中に、きまって現れる高から低への低まり。そうして、そのタキの位置のちがいを比較していけば、その方言のア体系の全貌やその特色が明らかになるような低まり》

の意味である。すなわち、宮田氏の〈アクセント中核〉とほぼ同意義である。タキの方をとった理由は、一つは、中核という言葉は、タキの直前のモーラをさすようにもとれ(現に服部博士はそのようにこの術語を使っておられる)、はっきりしないからである。私はモーラを問題にするよりも、高から低への低まりそのものを問題とする。それが、あえて術語としてタキの方を採った理由の一つである。

タキをとった理由としては、もう一つ、柴田君のページ五五あたりの論述と関連するが、〈中核〉には、一つの文節に一つ以上あってはまずいような語感があるからである。タキならば、一つの文節の中に、場所によっては二つ現れてもおかしくないと思う。これについては次章に述べる。

六

さて、柴田君は、第三章で、京都市方言を手はじめに、諸方言のア体系の新解釈を提示しておられる。まず、京都市のア体系については第一節でこう言われる(ページ五〇下段)。

スズメにおいて、明らかにズからメへの高まりが認められるから、できれば、「メ」の高も体系として表わしたいと考えられる。

これは趣旨として私も賛成である。そうして同君は、のぼりア核を適用し、スズ「メと解釈された。これもそれ自体としてはわるくはない。が、同君は、《ア核は、一文節については一個のみ》という原則から、代りに、カブトを〇「〇〇と表記される。そのために、ブからトへの低まりを表わさないことになってしまった。これは、考えものだと思う。

私の考えでは、京都方言においては、スズメのズからメへの高まりより、カブトのブからトへの低まりの方が大切である。例えば、京都方言で「お側」はオソバ型、「お蕎麦」はオソバ型であるが、低中高とか低高高とかの音調でオソバと言うと、京都の人は「お蕎麦」と感ぜず、「お側」と感じる。また、スズメにしても、コノスズメとかスズメガとかいう時には、あっさりメの高まりは消えてしまう。カブトの方はこのようなことがまずない。コノカブトというような時には、トの低まりが消えると言えば消えるが、それと同時にブの高まりも消える。私に言わせるとカブトにおけるブからトへの低まりは、フタリにおけるタからリへ移る低まりと同じ性格のものだと思う。この点において、スズメにおけるメの高まりをぎせいにしても、カブトにおけるトの低まりを尊重した、和田実君や筆者の見方の方が、私はよいと思う。

元来、京都方言では、サクラ・フタリ・スズメ・カブトという四つの文節のアクセントの間に、

サクラ対スズメ＝フタリ対カブト

という比例式が成り立っている。この事実は、これらの語の前やあとにほかの語がつく時の性能その他から考えて、重んずべきだと思う。この関係は、和田君や筆者の見方では計算されているが、柴田君の見方では無視されている。

次に「鳩」の類を三モーラの語と見ようとする意見も、斬新ではあるが、やはり苦しい。これは私のように、二つのタキを想定した方がよいと思う。柴田君は、一つの文節に二つのタキは認められないとする。が私に言わせると、そこが、タキが中核の類とちがう点である。

すなわち、英語などにおけるアクセントの中核は、前後の音節に比べて強く発音される部分であり、これが二ヶ所にあっては、正に、語の統合はこわれてしまう。が、タキは、前後の音節より高く発音される部分でもないし、次が低い高の音節でもない。高から低への低まりそのものである。だから、タキが二つあると言っても、もし、そのうちの一つが文節のはじめに、——川上蓁(シン)君のいうゼロ・モジュール(註)にある時は、高い部分が二つ出来るわけではない。私の考えでは、京都語の「兜」は、」カブ」トのように二つのタキをもつ文節である。これを一つポッンと発音すれば、前のタキは現れぬ。その点、東京のヤマ」の文節末のタキに似ている。前のタキが生きて現れる場合は、他の文節の次に来た場合で、しかもその文節が、私の言う高結式の文節（最後が高で終り、次の文節が高く続くことを許す文節）の次に来た場合である。すなわち、コノ・コンナのような、高高型・高高高型の文節は柴田君も認められるように、ア核をもたぬ文節である。こんな文節ばかり続いたのでは、文節の切れ目がはなはだ紛らわしい。そこで、それを補償する意味で、時に」カブ」ト（兜）のような、タキを二つもつ文節が存在し、それが、文節のはじめのタキで前のタキをもたぬ文節の終りを示し、あとのタキで自分の存在を示すと考える。

私は、東京旧市内まで出掛けると、中央線の西荻窪駅でおりて自宅へ帰るが、にわか雨の降り出した夕方などに改札口を出てく

ると、駅前の広場には、雨傘をさし、別にもう一つたゝんだ雨傘をもった奥さん風の人がたくさんいて、御主人の帰りを待っている。私のいう文節の頭のタキは、この奥さん連が持っている、たゝんだ雨傘のようなものである。もしひとりの人が二つの傘をさしていたらおかしかろう。しかし、一つの傘をさしたほかに、もう一つたたんだ傘をもっているということは、ほかに傘をもたぬ御主人が存在する以上、むだではないのである。

タキを二つもった文節は、タキを全然もたぬ語があることを予想して存在しているのである。

〔註〕「国語国文」二五の三に発表された『アクセント表記の零と無限大』の中に見える術語。第一モーラの直前をゼロ・モジュールと呼び、以下、第一モーラの直後を一モジュール、第二モーラの直後を二モジュール……のように呼ぶ。

同じ章の第二節には、東京方言のアクセント体系についての柴田君の見方が発表されている。これは宮田幸一氏が以前に提出されたものと大体同じであり、特に問題はない。たゞし、大きなちがいは、宮田氏は、〇〇」型、〇〇〇」型というような、文節末にアクセントのタキのある型を立てておられるが、柴田君は、《文節の連続における現象はとりあげない》という立場から、そういう型を認められない点である〔註〕。この点で、私は宮田氏の行き方に賛成することは前に述べた。

〔註〕柴田君がこの節で、ピッチ・レコーダーによる「花」と「鼻」との単独の場合のアクセントを比較して、その第一モーラと第二モーラとの間の高低に開きがないことを立証してくれられたのは嬉しいことである。この両者の間に下中対下上というような開きがあるという説が佐久間博士以来有力だったために、今では、NHKあたりでも、「桜」はサクラ、「男」はオトコと表記するという、音韻論的にはなはだ感心しない表記法が一般化していて、不便この上ない。柴田君のこういう実験の結果がそういう表記法に対する反省の材料となることを希望してやまない。

七

次節で、同君は、鹿児島県頴娃(エイ)町方言のア体系を、くだりア核・のぼりア核の両者によって、解釈しておられる。ここを読んで、私は、この、のぼりア核・くだりア核というものに対してこんな疑問が浮かんできた。

一体、宮田氏が東京アに対して、高から低への下降を〈アクセント中核〉またはタキと呼びはじめたのはなぜであったか。それは英語の場合とはちがい、ある音節に中核があると見ることが不便だからである。東京方言には、例えばはアタラシイ（新しい）のような、続いた幾つかのモーラが高く発音される型があり、これは英語のような考え方ではどうにも解釈がつかないからである。ところで問題のエイ方言は、一文節のうち一モーラだけしか高くない。そうすると、これは英語と同じようにとりあつかい、〈オトコ（男）はコにア中核がある〉と言い、〈オナゴ（女子）はナにア中核がある〉と言えば、それですむのではないだろうか。

もっとも、柴田君は、「各方言の独自性が日本語としての共通性の上に浮き出るように」との意図から、このエイ方言をも、の

文節の種類	平山氏のA型	平山氏のB型
一モーラの文節	ナ　シ	○」型（(●)） 語例、「菜」。
二モーラの文節	○」○型（(●○)） 語例、「名」「鼻」「名が」…。	○○」型（(○●)） 語例、「花」「菜が」…。
三モーラの文節	○○」○型（(○●○)） 語例、「女子」「鼻が」…。	○○○」型（(○○●)） 語例、「男」「花が」…。
四モーラの文節	○○○」○型（(○○●○)） 語例、「かまぼこ」「女子が」	○○○○」型（(○○○●)） 語例、「てのひら」「男が」…。

ぼり・くだりの両ア核で、解釈しようとされたのであろう。その試みはおもしろい。が、そうだとすると、このア体系に対し、タキだけによる解釈を試みてもいいはずである。私は、それが実際にでき、しかもそのタキだけによる解釈の方が、むしろ、すぐれていると思う。例えば、右の表のようになる。平山氏のいわゆるB型の見方が柴田君とちがう。

なぜ、B型をこのように見るか。エイ町は私も今年冬後ればせながら採訪したが、第一に、エイ町の人にハナという音連結をまっ平らに発音して聞かせると、あっさり、それは「花」の方に聞えると言う。「花」でも「鼻」でもない妙な発音だ、などとは言わない。私はこのことから、「花」における高まりは、「鼻」における低まりのようには重要ではないと思うのである。つまり「花」には、のぼりア核がないとする方がいいと思う。第二に、もし、「花」を柴田君のように○「○型とすると、「花ぢゃ」は、○「○○型と表記することになる。「女子」の○○○型とはちがう型に表記されてしまう。しかし、「花ぢゃ」と「女子」とは明らかに同一アクセントである。もし、「花」を私のように○○」と表記しておけば、「花ぢゃ」はハナ」にヂャがついた形、すなわちハナ」ヂャとなって具合がよい。「男ぢゃ」と、「てのひら」との関係も同様である。これは、タキ一本の行き方の方がすぐれていることになりはしないか。

なお、私のいう「花が」「男が」の文節末の」は、次のような連文節の場合に、性能を発揮する。

ハナガ＋チル→ハナガチル（花が散る）

オトコガ＋オル→オトコガオル（男が居る）。

なお、柴田君がページ五八にあげた出水（イズミ）町方言では、私の調査では、連文節がハナガチル・オトコガオルとなる。これはB型がエイ方言や鹿児島方言とちがい、タキのない○○型・○○○型だと見る。

こんなわけで、私は、柴田君の、「アクセント体系という点からは、やはり京都市方言近いと言いうる」という考えに賛成しない。同君のページ四六の表で、鹿児島県エイ町方言が小倉市方言などにはるかに近くなっている事実の方を私は重要視する。

次の第四節では、宮崎県都城市方言のア体系を、のぼりア核一

元で解釈しておられる。この方言に関する私見は、すでにふれた（ページ二六）。もし、私流のタキ観による、この方言の解釈を掲げるならば、こうなる。

○」型（《●》）語例「柄」。○○」型（《○●》）語例「川」「皮」「柄が」。○○○」型（《○○●》）語例「男」「川が」「皮が」。文節末のタキは、次のような文節と文節との接続の時に、性能を発揮する。

エガ＋アル→エガアル
カワガ＋ナガレル→カワガナガレル

八

柴田君は、都城方言について、埼玉県蓮田町方言のアクセントについて、新しい見方を適用され、これはのぼりア核だけで解釈されるア体系だと結論された。ここの論述は、実に見事である。が、拍手を送る前に、同君が私の考えを誤解しておられる個所があるので、一言弁明をしておきたい。

それは、私が蓮田のア体系を、〈京阪アと似たア体系だ〉と言ったことについてである。私はたしかに似ているとは言った。がこれは、決して同じ系統だと言ったのではない。動物学では、イモリは両棲類に属し、ヤモリは爬虫類に属するが、それでも、動物図鑑などには「イモリはヤモリに似……」と書いてある。系統の全然ちがうものでも、外形の似たものを似ているということは、私は差支えないと思う。

同君は、私の考えを、旧稿『埼玉県下に分布する特殊アの考察』から引かれたが、私は、そのページ一〇八に同稿の要約をこう書いている。

《埼玉県東部に分布するアクセントはその外観だけから判断すると、東京アクセントとは非常に異り、寧ろ上方アクセントに近いものである。然し此の埼玉アクセントなるものは、個々の語のアクセントを仔細に比較して見ると、上方アクセントとの間には直接親近関係を有するとは思はれず、寧ろ〈東京アクセントから変化して出来た〉と見做さざるを得ないものであって、東京アクセントの系統のものだと思はれる》

私は、この考えを、蓮田町ア体系を知った昭和十二年にすでに発表している（日本音声学協会第四十三回研究会）。同ア体系を京阪アの系統だと思ったことは一度もない。したがって、どこかに、ソソッカシイ学生がいて、蓮田地方と京阪地方との社会的な結び付きをアクセントの類似から説明しようとしたそうであるが、それは私の論文をよく読まないからである。それは断じて私の責任ではない。

さて、弁明は以上にとどめ、柴田君の蓮田町アの解釈を読んでみると、同町のアクセントの音声学的観察はすべて私の観察に賛成してくれておられるので、これに対しては何も異論がない。そうしてここの解釈は、柴田君のこの論文を通じて最も水際立っており、のぼりア核なるものを考えることの必要さが本道に明らかになったように思われる。実に、蓮田町方言は、同君のアクセント観を立証するために存在しているかのような印象さえ与える。

しかし、ここにも、問題がある。それは、蓮田方言は、アクセントの不安定な方言だということである。この方言の高低の差ははなはだ微妙で、柴田君の言われるごとく、時には、一型アかと

紛うことさえある。これは何を意味するか。一つのア体系から、次のア体系へ変っていく過渡期にある方言だと私は思う。

一体、ア体系の変化の過渡期においては、私のタキはどういう性質を表わすものだろうか。かりに、○」○型の文節類が○○」型に変化するとする。その時、その文節類は、○」○型とも、○○」型ともつかぬような音調で発音される時期を通ると想像される。私のいうタキよりも、柴田君のいうのぼり核の方が安定しているのは、そういう時期においてではないか。そして、蓮田方言は、そういう時期にある方言の例なのではなかろうか。すなわち、私の解釈では、蓮田町方言は、次の(乙)のようなタキの組織から(丙)のようなタキの組織に移る途次にあると思う。(1)(4)(8)の文節類を除いて、この方言では、大規模な型の変化が行われつゝあるわけである。

文節の種類	(甲)東京方言	(乙)今の蓮田方言	(丙)将来の蓮田方言
(1)「絵が」「雨」の類	○」○型	○○」型	上欄に同じ
(2)「足」「置け」の類	○○」型	○○型	○」○型
(3)「飴」「柄だ」の類			
(3′)「柄が」「置く…」の類	○○型	上欄に同じ	○○」型
(4)「秋が」「兜」の類	○」○○型	○○」○型	上欄に同じ
(5)「足が」「心」の類	○○」○型	○○○」型	○」○○型
(6)「頭」「上れ」の類	○○○」型	○○○型	○○」○型
(7)「飴が」「形」の類	○○○型	上欄に同じ	
(8)「兜が」の類	○」○○○型	○○」○○型	上欄に同じ
(9)「心が」の類	○○」○○型	○○○」○型	○」○○○型
(10)「頭が」の類	○○○」○型	○○○○」型	
(11)「形が」の類	○○○○型	上欄に同じ	○○」○○型

私のタキ観は、もう一つ、蓮田アクセントの成立の事情を物語っている点にも強みがあると思う。すなわち、右の表の(甲)(乙)で見るように、蓮田方言ではタキの位置が、東京方言よりも一つずつ後のモジュールにある。だとすると、蓮田アの体系は、東京アの体系から、タキが規則的に一モジュールずつ後にすべって出来たア体系にちがいない。

柴田君ののぼりア核による解釈は、なお山形県小国方言や大島方言のア体系にも好都合のようであるが、これも、かなり型の区別の曖昧なア体系らしく、変化の過渡期にあるものと見られる。

九

次の節、さらにその次の節では、柴田君は、山形県鶴岡市方言と岩手県宮古市方言のア体系を、のぼりア核で解釈される。ここでも、蓮田方言同様、のぼりア核による解釈は、なか〳〵威力がある。〔註1〕

実は、私も、十年あまり前に、鶴岡方言によく似たア体系を有する岩手県盛岡市方言を、柴田君ののぼりア核に近い概念で解釈しようとしたことがある。先(ページ二七)に引いた、金田一博士の『私自身の方言を顧みて』の中の言葉は、巻末の博士の註記

<table>
<tr><td rowspan="4">起伏式</td><td>○|○型（(●○)）
語例、「秋」「絵に」</td><td>○|○○型（(●○○)）
語例、「兜」「秋が」</td></tr>
<tr><td>○○|型（(●●)）
語例、「絵」
「絵が」</td><td>○○|○型（(●●○)）
語例、「空」「池」</td><td>○○|○型（(○●○)）
語例、「命」「空が」</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>○○○|型（(○○●)）
語例、「従兄」「頭」「池が」</td></tr>
<tr><td>平板式</td><td>○型
(イ)ナシ
(ロ)(○)型
語例、「蚊」</td><td>○○型
(イ)(○●)語例、
「咲く」「蚊だ」
(ロ)(○○)語例、
「風」「蚊が」</td><td>○○○型
(イ)(○○●)語例、「上る」
「風だ」
(ロ)(○○○)語例、「小豆」
「風が」</td></tr>
</table>

に見えるように、当時の私の考えの取次ぎだった。しかし、今は、その見方は、もっていない。なぜならば、この方言もタキで十分解釈できると思うからである。鶴岡方言も同様だと思う。

柴田君は、私の観察報告をもととして、鶴岡方言のア体系をページ六四に示された。が、私が考えるところでは、右の図のように、動詞や、名詞プラス「だ」の形だけに見られる型、平板型の(イ)も加えてほしかった(註2)。

この方言を柴田君のようにのぼりア核によって解釈すると、平板式(ロ)の「風」「蚊が」「小豆」「風が」の類が、無造作な発音で下降調になることをすっきり説明できる長所がある。しかし、他方、平板式(イ)の、「咲く」「蚊だ」「上る」「風だ」の類の説明に窮する。これらは低平調・上昇調の両様に発音されるからである。

タキ観ではどうなるか。タキとは、先に述べたように、《必ず現れる低まり》である。「風」「小豆」の類に現れる低まりは、必ず現れるわけではないからタキではない。とすると、これは平板式に属する語ということになる。すなわち、この方言のア体系は、右の表のように、平板式の語が二種類あり、(イ)のように《そこで切れるア単位》と、(ロ)のように《次に続くア単位》とで平山氏の反省的型を異にすると解く。

さて、盛岡市の人に、ハナガという音連結を、低高高の音調で聞かせると、彼はハナガ（鼻が）の意味にはとらず、ハナガ（花が）の意味にとる。これは、私が、盛岡方言では、音の低まりよりもその反対の高まりの方が、重要な意味をもつのかと以前に考えた原因であった。しかし、その後、調査してみると、ハヤシという音連結では、低高高の音調は、ハヤシ（姓の名）とは取られず、ハヤシ（森林の意味の普通名詞）と受取られることがわかった。元来、盛岡方言では、「が」という助詞は、日常の談話では使わない。とすると、ハナガの実験よりも、ハヤシの実験を重んずべきものと思う。これが、私が、盛岡方言において、高まりよりも低まりの方を重要視すべきだと思うに至った理由である。鶴岡方言では、こうした観察を試みる機会をもたなかったが、事情は盛岡方言の場合と同じだろうと思う。

また、タキ観に立つ時は、鶴岡方言は、東京方言とよく似たア体系を有することになり、これも実際に即していると思う。そうして、さらに、この見方に立てば、前々章のエイ町方言のア体系の成立の解釈がつく利点がある。

すなわち、鶴岡方言で、「風」「小豆」の類は、無造作な発音

では下降調に実現するが、これは将来において、カ」ゼ、アズ」キというようにタキが文節内部に生まれようとしている状態だと見ることができる。現在の鶴岡方言がそのように変化したら、エイ町方言に非常に近いア体系が出来上るわけではないか。

〔註1〕 もっとも、鶴岡方言も、宮古方言も、ともに一モーラを卓立するア体系である。したがって、のぼりア核とかくだりア核とかを考えるよりも、英語と同じようなア中核を一つ考えれば、それが一番簡単な解釈である。ここは、エイ方言の場合に試みたように、ア核乃至タキを使って解釈することにしての論である。

〔註2〕 柴田君はページ四九の上段あたりで、従来の研究では、名詞のアクセントの型だけをもととして、すべての文節のアクセントの型の種類を尽したことにしていることを難じておられる。が、これは、鶴岡方言のように、動詞その他に、名詞にはないアクセントが見られる場合に、はじめて必要なことだと思う。ページ五〇の上段を読むと、同君は、和田君の『アクセント観・型・表記法』あたりを読んでそう思われたらしいが、私から代って答えると、和田君は京阪語について何万という語についての型を調べ、《他の文節に現れる型はすべて名詞に現れる》という結論を得た。その結果、名詞の型だけを例にあげられたものである。

岩手県宮古市方言は、私はまだ観察の機をもたないので、はっきりしたことは言えない。が、鶴岡方言とほぼ同様にして、

カラス——〇」〇〇型

ココロ——〇〇」〇型

サクラ・オトコ——〇〇〇」型

と解釈できはしないかと思う。柴田君によれば、カラスは高低低調というよりもむしろ高高低調に近く発音されるらしい。だとすると、この方言のこの語類は、〇」〇〇型から〇〇」〇型へ変化する過程にあるのではあるまいか。

十

以上、第六章—第九章のように見てくると、柴田氏がのぼり・くだり両核で解釈されたア体系の諸方言は、次のようになった。

(一) タキ観で解釈した方がいいもの。
京都方言。鹿児島県エイ方言。同出水方言。

(二) タキ観でも同じ程度に解釈できるもの。
東京方言。鶴岡方言。

(三) のぼりア核・くだりア核観の方が解釈しよいもの。
埼玉県蓮田方言。山形県小国方言。同大島方言。

(四) (一)(二)いずれとも判別しかねるもの。岩手県宮古方言。

右の(一)——(四)うち、地理的には(一)(二)の地域が断然広い。すなわち、《のぼりア核が有意義なものは、大体ア体系が変化を起しつつある過渡期の方言だけだ》これが、私の考えである。

ところで、ここに、方言の中には、タキ観ならば解釈がつくが、のぼり・くだり両ア核観では、どうにも解釈がつかぬという方言がある。服部博士以来、『補忘記』時代の京都アクセントのおもかげを伝えているとして名の高い高知方言、および和歌山県田辺市方言がそれである。高知市方言のア体系と、それに対する

高起式

○型（《●》）――○○型（《●●》）――○○○型（《●●●》）――○○○○型（《●●●●》）

語例、「蚊」。　語例、「風」。　語例、「魚」。　語例、「友達」。

「○」型（《●》）―

語例、「日」

―「○」○型（《●○》）

語例、「山」。

「○○」○型（《●●○》）

語例、「頭」。

「○」○○型（《●○○》）

語例、「命」。

「○○○」○型（《●●●○》）

語例、「草花」。

「○○」○○型（《●●○○》）

語例、「石垣」。

「○」○○○型（《●○○○》）

語例、「鶯」。

低起式

「○○型（《○●》）――」○○○型（《○●●》）――」○○○○型（《○●●●》）

語例、「空」。　語例、「雀」。　語例、「絹糸」

「○○」型（《○●》）―

語例、「雨」。

―「○○」○型（《○●○》）

語例、「兜」。

「○○○」○型（《○●●○》）

語例、「味噌汁」。

「○○」○○型（《○●○○》）

語例、「中指」。

私の解釈は、右の表のようである。

型全体の関係は、京都方言とよく似ているが、「雀」「絹糸」などの反省的型が《○○●》・《○○○●》のように、最後の一モーラだけが高なのではなくて、《○●●》・《○●●●》のように第二モーラから高が続く点がちがっている。

この方言は、《一語のうちにア核は一つに限る》と考えては解釈できないが、私のように、二か所にタキのある型を考えれば、簡単に解釈がつく、と言えるのではないか。

私が思うに、日本語のア体系を、のぼり・くだり両ア核で解釈しようとするのは、毎日の日本式の食事を、ナイフとフォークで食べようとするようなものである。中には、カマボコのように食べよいものもあるが、ふつうの、焼きノリや、生卵や、ワカメの味噌汁などは、箸の方が食べよい。私は、日本語のア体系は、タキ観で解釈した方が簡便でもあり、合理的でもあると思う。

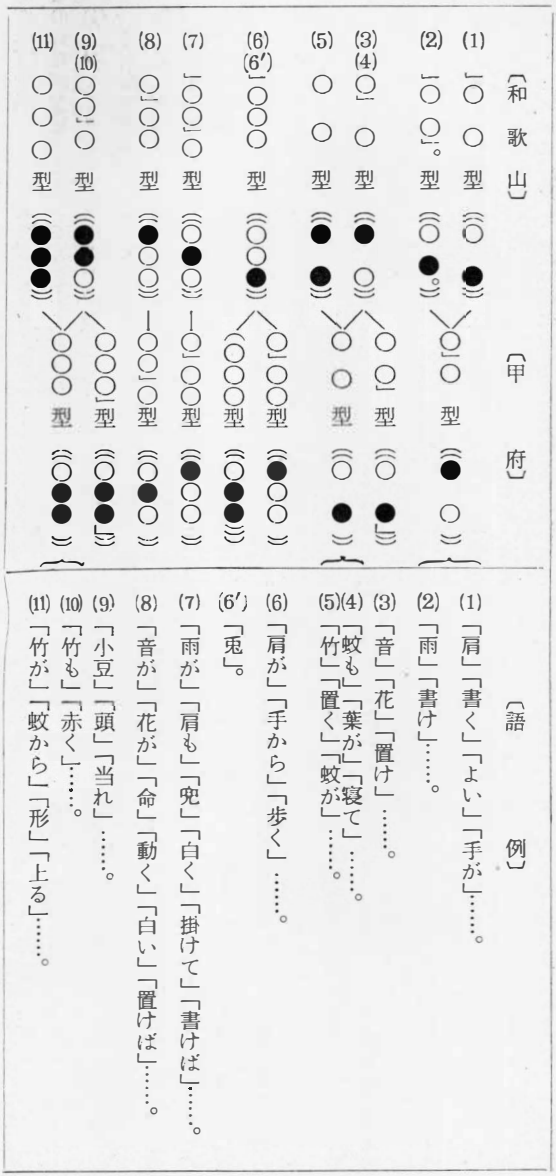
十一

さて、私はこの稿で、私の〈タキ観〉で、諸方言のア体系を観察することの優越を論じるのが目的だった。規定の紙数もつきてしまったので、ここに例として、タキ観が、日本語の諸方言のアクセントの相違の生じた過程を物語ると思われる事実を二つあげて筆をおきたい。

一つは、東西両アクセントの関係であるが、東京式アの代表として甲府方言をとり、京阪式アの代表として和歌山方言をとり、そのタキの関係を見れば、次のページの表のようである。

この対応関係を見ると、和歌山・甲府両方言におけるアクセントのタキは、きわめて簡単な原理で対応していることが知られる。すなわち次の一行につきる。

《甲府におけるタキは、和歌山における最初のタキよりも、一モジユールずつ後にある》



これは、東西両アのちがいが出来た事情を無言のうちに物語っていると思う。アクセントのタキは後の音節にすべりやすいことは、佐久間鼎博士以来、広く認められていることである。とすると、甲府方言のような東京式アは、和歌山方言のような京阪式アのタキが規則的に一モジュールずつ後へすべって出来たのだ！

私は、最近、三重県南牟婁郡阿田和町のアクセントを調査したが、ここで興味の深い事実にぶつかった。ここは、京阪アとそっくりな旧木之本町を東にひかえ、東京アとそっくりな旧入鹿村を北にひかえたところであるが、ここでは、「空」とか「箸」とかいう文節は、前に何もつかないと、ソラとか、ハシとか低平型であって、大阪の若い人たちのアクセントに近い。ところが、コノとかコンナとかのようなタキのない文節が前につくと、コノソラ、コンナハシというように、第一モーラが直前のモーラと同じ高さに引きあげられて、東京式に変る。これは、元来コノ」ソラ、コンナ」ハシであるタキが、一モジュール後へすべりつつある姿に相違ない。これは、この文節が京阪式アから東京式アへ変化する、ちょうど中間の状態を示すもので、東京式アが京阪式アから出たという私の考えを証明してくれていると考えられる。と、同

時に、京都・大阪方言のソラ・ハシの型の第一モーラの直前にタキがあると見ることの妥当性をも示しているものと考える。

十二

私のタキ観が、のぼり・くだり両核観よりすぐれていることはもう一つ、全国方言のアクセント分布図を描いた時にも現れるように思う。のぼり・くだり両核観でアクセント分布図を描く時にどのようなものができ上るかわからないが、かなり混沌とした、解釈しにくいものになりはしないだろうか。私のタキ観で、分布図を作れば別図のようである。

この分布図を眺めると、こんなことが言える。

(1) ゼロ・モジュールにタキのある型をもつア体系は主として京阪地方に近いところに分布している。(従線の領域)

(2) 第一モジュールにタキのある型を欠いたア体系は、京阪地方から遠い辺境地方に分布している。(縦線なしの領域)

(3) タキのない型をもたぬア体系も、京阪地方から遠い地方に分布している。(横線なしの領域)

(4) 文節の末にタキのある型をもつア体系も、京阪地方から遠い地方に分布している。(点の領域)

このうち、(1)(2)(4)は、《京阪地方に近い地方の方言は、タキが文節の頭の方に多く見られ、遠い地方の方言には、タキが文節の末かそれに近い個所に多く見られる》ということを教える。これは、《アクセントのタキは語の前の方から後の方へ多く移動する》という法則を考え合わせるならば、京都・大阪から遠い辺境方言のアクセントは、多く、型の変化を遂げた姿を示していると言えるのではないか。私は、旧稿『東西両アクセントのちがいが出来るまで』(『文学』二二ノ八)の中で、東京式アは京阪式アから出たものと考えて、服部博士の命名による甲種ア・乙種アという名称の意味を再認識したが、さらに、乙種アから再転したものと見て、西南九州方言・山梨県奈良田方言・埼玉東部方言のアクセントを丙種アと呼びたいとを述べた(ページ八三)。ところで、この甲乙丙三種のアクセントのタキの位置を比べてみると、甲種はゼロ・モジュールにタキをもつ点に特徴があり、丙種は多く末尾にタキをもつ点に特徴がある。そうして、私が丁種方言と呼ぼうとした、鹿児島県枕崎市方言は、タキがあれば、それは語尾のみという最も極端な姿をもっていることは、さらにおもしろいと思う。

最後に思い起されるのは、柴田君が第二章に試みた、型の統合・分離によるアクセント体系の分類である。私は、あの分類を高く買うこと前に述べたとおりであるが、私のタキ一元の解釈によるアクセント体系の分類は、期せずして、同君の第二章の分類と同じような結果が出ているではないか。私は思う。恐らく柴田君ののぼりア核くだりア核の考えを深めると、私のタキ一元の考えになり、同君の第二章の結論と第三章の結論とは、非常に近付くのではないか、と。

—名古屋大学助教授—